
友とともにゾンビ

星 掌造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友とともにゾンビ

【Nコード】

N5873Y

【作者名】

星 掌造

【あらすじ】

中学校二年生の桜木 龍治とその親友、川端 真司はクラスメイト35人と共に林間学校にやってくる。しかし、クラスメイト達が何らかの理由によってゾンビと化する。

彼らは無事に家へ戻れるのか？

ゾンビと化した理由は？

不定期連載です。

いまだ執筆中ですが頑張って書きますので、よろしくお願いします。

O n e d a y 陸の孤島

森の木を切り倒し、木に囲まれた中にその建物はあった。

桜木 龍児を乗せたバスはその建物の近くに止まると、きた道をさつさと戻って行った。

「あーあ…帰れるのは、一週間後か。」
隣で親友の川端 真司が呟いた。

中学二年の秋、二年生最大のイベント林間学校で大谷中学の彼ら35人はY県の山奥に来ていた。

バスを借りて、高速道路を走り続け、民家を通り、山を越え、道なき道を進み、ようやくこの宿泊施設に着いたのだ。

歩いて戻れば遭難するというのは山登りをしたことのない桜木にもわかった。

「部屋に荷物をおいて、松の家の前に五分後に集合。では解散。」
担任の青木先生は51歳のベテランの先生で167センチの桜木、

川端よりも小さいながら、威圧感のある顔によって、存在感は抜群だった。

「遅れないようにね。」

体育担当の副担任でもある新人先生の田中はみんなが施設に入り始めた頃に言い出した。そんなのお構いなしに施設へ入った。

「床抜けないよな…。」

川端の冗談も今回はかりは成立しなかった。

男子の部屋である竹の部屋があまりにも埃っぽく汚かったため、喘息持ちの佐藤が薬を呑んだのを桜木は確認していた。竹の部屋は施設としては、竹の部屋という広い部屋以外に、食堂、風呂のそれぞれ部屋もあった。

荷物をさつさと置くと、先生のいる松の家に急いで向かった。

「朝早くから出て、眠たい人もいるかも知れんが、そのおかげでま

だ1時だ。予定より早く探索時間を行う。」

「班に別れて下さい。」

青木に遠慮しがちに田中が言つと35人はザワザワとしながら班に別れていった。

「5時までに戻ってくることに。いいな？」

青木の言葉にうーす、としか聞こえないやる気のない返事をかますと班はそれぞれの進行方向へ歩き出した。

全部で七班あるうちの四班は桜木と川端の二人と中谷、関野、水口の男子五人という夢のない班構成となっていた。別に自分の顔はイケメンではないと思うが、桜木の本音としては、心の中では好きと思いつづけている松枝 咲と同じ班になりたいとは思っていたが、楽しめればいいや、とも思っていた。

「山だけというのも、なかなかハードだな。」

「水口が山好きだとは知らなかったもんで……。」

川端の嘆きに桜木は言った。

水口はいわゆる使い勝手のよい奴で、他の人が嫌がる事やめんどくがることをやってくれる、そのわりに面白いので班のリーダーを桜木と川端は押し付けたのであった。しかし、水口の隠れ山好きによつて、四班は山の頂上を目指す事となってしまったのだった。

それでも決められないよりはマシか……と川端は呟いた。

山とは言つても、言うまで高い山ではないので水口は大したことなさそうだが、残りの四人は水口とかなり差を広げ、歩いていた。

休憩も挟んで、一時間半後、ようやく頂上に到着した。時間潰しの為、40分程雑談をすると山を下り始めた。

「やべ、降ってきたぞ。」

山の天気は変わりやすいとは、よく言つたもので、さっきまで晴れていた空は、いまは雲に覆われ、雨が降っていた。

四班は少し早歩きで、山を一時間で下った。余談だが、このとき川端が勢いよくこけて、服が泥だらけになり、上半身裸で戻ってくるという伝説を作りだしていた。

結果的に、四時過ぎ程に戻ってきてしまったが、他の班も同じぐら
いだったので、特に気にしなかった。

最後の班が五時を過ぎて到着すると、男子、女子の施設で、お弁当
を食べ始めた。

「明日からは自分で作るのか…。案外、楽しそうだな。」

川端は弁当を食べながら言った。

「そうかあ？」

桜木は思わなかったが、あちらこちらでそういう声が聞こえている
のは、やはり男の性なのかもしれない。

One day 感染

ギヤヤアアア

人間が出せるとは思えない叫び声が遠くで聞こえると、しばしの沈黙のあと、松の部屋の男子は騒然となった。

「な、なあ、いまの女子がいる梅の部屋から聞こえたよな。」

否、それは間違いとなる。

ウオアアアアツ？

明らかにそばで叫び声が聞こえた。竹の部屋じゃない、施設内だった。声のした方へみんなが歩き出した。桜木、川端はそれについて行った。

ウウウウアアアツ！

呻き声と叫び声がまた聞こえた。

「風呂場か？」

城田という、ホラーなどまったく信じない男子が風呂場へ先頭きつて入った。

「この奥…だな。」

城田の後にみんなも続いて、覗いた。脱衣所には誰かが履いていた服が棚にしまつてあるだけであった。

ガラリツ、ドアが開いた音がすると、見るより前に桜木の頬に水がついた。それを手で触り、見てみると、手が赤く染まった。

血？

そう驚き、風呂場を見てみた。

「城田？うつ…」

気持ち悪いなんて言葉で表せられなかった。身体がボロボロになった人が、首から血が出ている城田を喰っているのだ。何人かのクラスの人はすでに目を背けた。

「おい、あれって益川だろ。」

川端の言葉にもう一度身体がボロボロになっている人間を見た。

目玉は落ちかけていて、皮膚は青と黒に変色し、剥がれ落ちていたが、輪郭や身長は確かに、スポーツの出来た益川であった。

「えっ、ま、マジかよ。」

桜木は川端に伝えるのも兼ねて言ったが川端は益川と城田の状態から恐怖で目が離れなくなっていた。

「川端…やべえ。」

「わかつてるよ？」

「ちげーよ？」

言葉と共に、川端を揺すった。それによって桜木を見た川端に、桜木は風呂場の奥を指差した。

「何かいる……。やつべ??」

桜木と川端は脱衣所を出ようとみんなをかき分け始めた。

一番前にいた桜木と川端がいなくなっただおかげで、他のみんなも風呂場の奥を確認し、逃げ始めた。

「早くどけ？」

引っ込み思案な性格なはずの大川が叫んでいる。

うわあああ?と誰かの叫び声が聞こえ、血が降ってきた。

やばい、やばい、やばい、やばい。

桜木は人をなにがなんでも掻き分けて、脱衣所から出て、玄関へ向かおうとするが、みんなが玄関で詰まっている。

脱衣所から他の人も出てきて、竹の部屋へ逃げる奴も出てきた。窓から逃げるつもりなのだ。

しかし、窓は確か三つしかなかったはず、すでに脱衣所から人間ではない物が這い出してきていた。間に合わねえ？

O n e d a y 迫る恐怖

桜木は叫ぶと、食堂に逃げ込み隠れた。自分の事でいっぱいになっていたが、川端も食堂へ逃げてきていた。川端が鍵のないドアを閉めた。

「な、なんなんだあれは？」

川端は桜木に聞いたが、桜木は答えなかった。いやむしろ静かにしろという意味を込めて、指を口の前で立てた。川端は口を閉めた。人間とは思えない彼らに音が聞こえたら人間がそこにいるという発想があるのかどうかかわからないが、とりあえず鍵のない食堂にいる今、最善を尽くすしかなかった。

「窓もないのか。」

桜木が川端に囁いた。

「おい」川端が答える前に、聞き覚えのある声がした。

桜木が辺りを見ますと、川端が横に長い机の下を指差した。

「中谷？」

桜木がつい大きな声で言うと、中谷がしつ、と桜木同様に指を口の前で立てた。

桜木はまずそんな顔すると、川端と共に机の下に入った。

ドアから椅子と机で死角になっているので、少しは安全そうだった。

「桜木、川端。これ持つとけ。」

やはり、小さな声中谷が包丁を渡してきた。

「あ、ありがとう。」

桜木は礼を言った。

桜木、川端は無二の親友であったが、中谷 陸ともかなり仲が良かった。桜木は、中谷ほど頭の回転が良いやつはいないのではないか、と思っていた。身長は桜木より小さく、イケメンでもない、頭もそこそこでいわゆる普通の中学生であったが、場への適応力や発想は並ではなかった。

「中谷は、いつからここに？」

川端が中谷に聞いた。

「二人が部屋に入ってくる少し前だよ。玄関や窓からは逃げられなさそうだったから。」

中谷はいまだ、ドアを凝視していた。

「まずいんじゃない？」

川端がドアを見ている中谷に言った。桜木もドアを見ているが、ただ横に引くだけのドアがさっきに比べて、あきらかに…

「押されてるな…。」

一体、何人の人が力をかけているのだ、というか横に引くことはできないのに、それだけここに力を掛けるといのは、やはりばれてるのだろうか？

「なあ、さっきからなかなか言えなかったんだけど…」

川端が二人に何か伝えようとした瞬間

ガタン？

ドアが外れ、倒れたドアからゆっくり奴らが立ち上がってきた。

「う、ううううう」

言葉ではない、奴らが発する音は嫌に恐怖心を与えた。

O n e d a y 脱出作戦

三人とも体を震わせているが、息を殺した。

沈黙の中、ペタリペタリという音だけがする。食堂にいても六体はいるだろうか…。廊下は死角になっているので、姿は見えないが廊下の軋み具合から、かなりの数は居そうだった。

「駄目だ、俺らばれてる。」

中谷が言った。

しかし、奴らはさっきから体を右に左に大きく振りながらドアの近くを歩いているだけであつた。

「とても、ばれてるようには…。」

「いや、さっきに比べて、廊下の軋む音が大きくなってる。」

つまり、食堂に人が食い物がある…。奴らはそう踏んでいるのだ。

「それって…ま、まずいんじゃないの？」

川端は焦り始めた。桜木も本当は心底震えていた。

「桜木、川端、一つ作戦がある。ただ説明するだけの時間がない。

俺についてきてくれ。」

中谷のついてきてくれ。という言葉に桜木は全てを託した。

中谷は机の下からゆっくりと出ると、突然、立ち上がり、ナイフを投げた。

クルリクルリとナイフは回転しながら奴らへと向かって行く。

奴らは避けようという動きを見せず、奴ら1体へもろにナイフが刺さった。

しかし、そいつは特に何もなかったようにナイフをそのまま放置していた。

「あああああう」

奴らがエサを見つけたとでも言うかのように、呻き声を上げ、桜木達の方へ、歩き出した。

「ど、どうすりゃいい。」

川端は奴らを見ながら言った。

「な、中谷？中谷？」

中谷は横にはもういなかった、辺りを急いで見渡すと、奥のキッチンでカチカチと何かしていた。

桜木と川端は前から向かってくる奴らから逃げようと思う気持ちよりも中谷の作戦が気になり、中谷のところへ向かおうとした。

「まだ、そこにいろ？」

中谷が大声で叫んだ。

しかし、奴らはすぐ近くにまで来ている。

桜木は腕を斬り落とした。

「ほ、包丁ってよく切れるんだな。」

川端はかなりパニックになり、何回も刺しまくっていたが、奴らが引っことうと腕を振ってきた為、尻餅をついた。

「こつちにきて？はやくしろ？」

奴らがまさに目と鼻の先なったところで中谷の方へ、桜木は包丁を投げ捨て、川端は腰が抜けている為、這ってきた。

中谷の近くで冷静に見てみると、ドアの外にも、食堂にも奴らが溢れかえっていた。

「ど、どうするんだ、中谷。」

すると、突如、ピピピピという音がなった。

「よし、奴らに突っ込め。」

はー？桜木も川端も大声で叫んだ。

「そんな馬鹿言っな、自殺行為じゃねえか…」

川端もようやく落ち着きを取り戻したようだった。

「いいか、出来る限り、奥に突っ込みたい。テーブルに乗ってから、ジャンプするぞ…その後は、逃げろ。」

中谷の言葉に、桜木は肩を掴んで聞いた。

「助かるんだな？」

中谷はゆっくりと頷いた。

信じるしかない…。桜木は覚悟を決めた。

「行くぞ、川端？」

川端は大泣きしながら、頷いた。

中谷が先陣切って、走りだした。

奴らの真横をギリギリで通過してテーブルに三人が乗ると、一気に走り出して、三人は翔んだ…。

桜木は自分の足が切られてる事に飛びながら気がついた。ふと、生きてきた全ての記憶が浮かび上がった。走馬灯というやつか…。そんな中、ゆっくりと時間が過ぎて行く。

グニヤリ…と奴らの首が変な方向へ折れた。自分の体の下もゾンビ、上も横もゾンビ…。

「し、し、死、死にたくない？」

カチツ！

小さな、小さな音であった。

しかしその直後、奴らの合間から炎が龍のように舞うのが見えた。暑い、息も出来ない。

狭い食堂は完全に火で万杯になり、奴らが燃えていた。龍のような火が消えると、とてつもなく、臭かった。

「逃げるぞ！」

近くのゾンビは体が溶けていて、動けなくなっていた。

中谷が、ゾンビを押し抜けて逃げ出した。

桜木はもはや思考は働いていなかった。ただ生きていたいという本能が体を動かしていた。

廊下にも玄関にもいまだ奴らはいたが、さっきより、動きはあきらかに遅い。

腕が振り落とされてくるが、なにがなんでも避けていく。

燃えて脆くなつた玄關のドアに中谷が突つ込むが壊れなかつたらしい。

「うおおおお？」

桜木が走つた勢いのまま、扉を蹴つ飛ばした。

「外れた、外れたぞ。桜木？」

中谷が歡喜の声を上げた。喜ぶ中谷の傍ら、桜木はあることに気が付いた。

「か、川端？川端は…？」

中谷は、はっ、となつた。

施設の中を振り返つて探す、奴らの姿が見えるだけであつた。

「くそっ…」

中谷が太ももを叩いた。

「うおおおお？」

奴らの上を人が飛んだ。

One day 脱出作戦（後書き）

五話目か六話目で、One dayを終えればいいな（――；）
と思っています

五話目は21日投稿予定

（予定通り投稿が行われない場合もございます）

One day 女子力

「か、川端？」

ある記憶がフラッシュバックした。

そうだ、あの綺麗なスライディングポーズは野球部に所属する川端、彼がセーフティバントを決めるときに見せるものだ。

ズザザッ

川端が桜木の真横に滑り込んできた。

「か、川端…。セーフだ。」

川端はいまだ、地面に顔を埋めたままであったが、右手の親指が静かに立った。

「桜木、川端、奴らが来た。とりあえず、走るぞ！」

走りだしたはいいが、どこへ行けばいいのだ…。

いや答えは簡単だ、奴らのいないところに違いない。

この施設は行ける場所が少ない。さっそく、道が二手に別れていた。

「どっちにいく？」

川端が言った。

女子がいる梅の部屋、多分、あっちも同じ状況だとすれば、行く訳にはいかない。

すると、簡単だ。左はない。

「右だ。右へ進もう。」

桜木が答え、再び走りだそうとしたときだった。

「ま、まって…まって？」

女子の声がして、左の道に人影が見えた。

中谷が警戒を強める。

「えっ、咲さん…」

現れたのは、クラスメートの女子四人だった。その中には、桜木が

好きな松枝 咲もいた。

「た、助けて…」

女子から言葉として聞こえたのはそれだけで、あとはただ泣いているだけだった。

「あうああああ」

奴らがやってきた。

いやー？と女子達が叫び、パニックになっていく。

「まずい。よ、よし、みんなついてきてくれよ。」

中谷がみんなを落ち着かせ、再び走る準備に入った。

「さ、咲さん。大丈夫…？」

コクリ、と小さく頷いた。

か…かわいい…

こんなこと思っている暇じゃない。それでもそう思わせる咲さんの力は偉大だった。

One day 女子力（後書き）

なんだかんだでギリギリ20日に間に合わせました。

今回はストックを作る必要もあつて、量が少ないですが、おかげさまでかなり話の構想も固まり、ハイスピードで書いています。

ですので、これからも応援よろしくお願いします。

次回は20日か21日に投稿予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5873y/>

友とともにゾンビ

2011年11月20日16時28分発行